

が地面に落ちてくるフラス(ふんと木くずの混合物)だ。5〜9月に幼虫が盛んに出す。これを基に幼虫が木に開けた穴を探して、駆除する。穴は

クビ

クビアカツツカミキリの防除のポイント

- ✓幼虫は株元以外にも
- ✓高い位置の枝や細い枝にも生息
- 木を広範囲に観察する
- ✓成虫のいる場所は時間により異なる
- 日中は枝や幹、夜間から朝は樹冠が多い
- 早期の薬剤散布は樹冠までかける
- 晴れの日の午後2時ごろは幹に降りてくる傾向
- 発見、駆除がしやすいタイミング

生息場所
桃農家 奈良 さんの工夫

(取材を基に作成)



奈良さんはフラスの発生した木にリボン巻いて見回りの目印にする

株元にある場合が多いが、同県の調査では、高さ3m以上の枝や、直径5cmほどの細い枝にもあった。そのため、木を広範囲に観察してほしいという。駆除に使うスプレータ

イブの殺虫剤について栃木県は、6月までの使用を勧める。幼虫が木の中心部でさなぎになり、薬剤が届きにくくなる前にまく。6月以降は針金をどて掘り取って駆除する。成虫は6〜8月に活動するが、両県の調査では成虫のいる場所は時間により異なることも分かってきた。日中は枝や幹、夜間から朝は樹冠に多いことが多い。そのため、早期に薬剤を散布する際は樹冠までかけることが重要だとする。

木に目印見回り

いなか効率よく見回れるようにする。フラスから幼虫が潜む穴を特定したら、先端を折り曲げた針金を差し込み駆除する。針金に幼虫の白い体液が付着すれば、駆除ができた判断する。奈良さんは、ブラックライトで卵を見つけたら、枝木奥が5月に発表された技術で、ライトで紫外線を当てると卵が発光する。産卵時期の7月上旬の夜に実施したところ「卵は簡単に見つけられた」という。一方、桃の販売時期と重なり、作業時間が確保しにくいことを課題に挙げた。(丸山紀子が担当しました)

国産肥料拡大へ熊本でフォーラム

堆肥や汚泥の活用探る

国産の肥料資源の活用拡大に向け、関係者が集まって情報交換するフォーラムが20日、熊本県益城町で開かれた。肥料製造業者やJAグループなどが49のブースに出展。地

域資源を活用した循環型農業に向け、家畜ふん堆肥や下水汚泥などを活用した商品が並んだ。「国内肥料資源の活用拡大に向けたマッチングフォーラム」と題



写真上川佐賀市の下水汚泥由来肥料とPR資料。同中JA家畜ふん尿などを使った南国産産の有機肥料。同下JA鹿兒島県経済連の「リッチシリーズ」(いずれも20日、熊本県益城町で)

して、農水省の補助事業の一環で実施した。6月の東京での開催に続いて2回目となり、佐賀市は下水処理過程で発生する汚泥の堆肥化事業について紹介した。肥料化は、焼却するよりも環境面やコスト面で優れていると

500人以上が参加した。佐賀市は下水処理過程で発生する汚泥の堆肥化事業について紹介した。肥料化は、焼却するよりも環境面やコスト面で優れていると

スマート化で課題解決

農研機構設立130周年シンポジウム

農研機構は20日、設立130周年を記念したシンポジウムを東京都内で開いた。基調講演をした日本総合研究所の三輪泰史氏は、農業で環境負荷に配慮することで、経済的なメリットも得られる仕組み作りが必須と指摘。スマート農業技術の発達や、国内資源の活用に向けた同機構の役割発揮を求めた。企業や研究者ら関係者、350人超が参加した。三輪氏は「農業・食品産業の可能性」と題して講演。スマート技術を活用しながら耕作放棄地を飼料栽培に活用するなどの取り組みを推進すべきだとした。他、スマート農業を活用して農家から作業を請け負う事業者の役割が大きくなるなどの考えも示した。

同機構理事も講演した。食料安全保障について講演した湯川智行氏は、輸入依存からの脱却に向け「少ない人数で大規模圃場に対応できる生産性の高い技術が求められる」と指摘。人工知能(AI)や情報通信技術(ICT)などを取り入れて効率的に施肥・防除を行い、特に大豆・小麦・飼料作物などの増産が求められるとした。同じく理事の井手任氏は「生産性向上と環境保全の両立は、新たな農業の成長の柱」と強調し、AIやデータを活用した土壌・病害虫管理の研究を進めるとした。

同機構九州沖縄農業研究センターの荒川祐介氏が混合堆肥複合肥料について基調講演。熊本県のJA菊池が堆肥センターの取り組みを発表した。が求められるとした。同じく理事の井手任氏は「生産性向上と環境保全の両立は、新たな農業の成長の柱」と強調し、AIやデータを活用した土壌・病害虫管理の研究を進めるとした。

岩手で露地栽培最新技術を実演

農研機構は10月25日、農業技術に関する講演会やスマート農業の実演会を、10月25日に岩手県内で開く。同機構

理想条件に仕上げるのは難しい。堆肥センターと肥料メーカーが協議し、設備投資を含めた役割を決める必要がある」と提起した。JA鹿兒島県経済連は、みどりの食料システム戦略に対応し、地域資源を活用した堆肥入り低コスト肥料「リッチシリーズ」を昨年から販売。農産事業部の新村浩一郎部長は「国内資源を活用し、国の目標より早い2030年までに化学肥料の30%低減を目指す」と強調した。農研機構九州沖縄農業研究センターの荒川祐介氏が混合堆肥複合肥料について基調講演。熊本県のJA菊池が堆肥センターの取り組みを発表した。

今更聞けない 営農用語

発症抑制万全で

農場で飼う豚に豚熱が広がらないよう接種する。発症しない程度に弱毒化させた豚熱ウイルスを接種することで抗体が備わる。接種後も感染はするが、抗体が体内でのウイルスの増加を抑えるため、発症が抑えられる。親豚は原則、最大4回接種する。子豚のときに1回目を、その後6カ月後に2回目、その後は1年ごとに接種する。親豚にせずつ出荷する豚は、接種済みの母豚